

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.108 October, 2010

目次

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ ... 1	2010年度新規プロジェクトの紹介(第2回) 「環太平洋とポストコロナリズム」研究概要 文学部特別任用教授 大熊 昭信 9
センター叢書紹介 ジャズ研究の新たな領域のために 『ニュー・ジャズ・スタディーズ』 経済学部教授 宮脇 俊文 3	シリーズ・本を読む 大橋直子・小山論『中国で成功するマーケティング』 (日本経済新聞出版社 2008年) 経済学部准教授 山本 晶 10
国際シンポジウム報告 モダンガールと植民地的近代 文学部特別任用教授 佐藤 パーバラ 4	白杵陽『大川周明 イスラムと天皇のはざままで』 (青土社 2010年) 法学部非常勤講師 田浪 亜央江 11
国際会議出張報告 Network-Based Information Systems 2010 (NBIS2010) CAPS 特別研究員 池田 誠 5	富永茂樹『トクヴィル 現代へのまなざし』 (岩波書店 2010年) CAPS 主任研究員 愛甲 雄一 12
報告・CAPS 主催 拡大研究会 講演：旅としての『最勝四天王院障子和歌』 仏国立東洋言語文化大学教授 Michel Vieillard-Baron ... 6	波戸岡景太『オープンスペース・アメリカ 荒野から始まる環境表象文化論』(左右社 2009年) CAPS 客員研究員 菅原 大一太 13
シリーズ・若者たちのアジア太平洋世界(第6回) 植民地教育の痕跡を追いつづけて 文学部助教 岡田 泰平 8	センター活動報告、センター招聘外国人研究員 14

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ



アジア太平洋研究センター設立30周年記念
2010年度連続講演会
「人間の安全保障と北東アジア
サステイナブルな地域社会をめざして」

アジア太平洋研究センター(CAPS)では来年度(2011年度)のセンター設立30周年、ならびに2012年度の成蹊学園創立100周年を記念して、「人間の安全保障と北東アジア サステイナブルな地域社会をめざして」と題した連続講演会やシンポジウムを、2年間に渡って開催して参ります。

2010年度の今年は3回の講演会を通じて、政治や環境、文化、移民などさまざまな観点から北東アジアの未来を考察する予定です(各回の詳細については学内外に貼り出してあるポスター・チラシ〔左〕をご覧ください。センターのHPでご確認ください)。各講演会に対する皆様のご参加を、心からお待ち致しております。

2010年度第2回講演会のお知らせ
日 程：2010年12月18日(土) 15:00 ~
テーマ：地球環境保全とアジア環境協力の課題
講 師：寺西俊一(一橋大学教授)
場 所：成蹊大学3号館102教室
(入場無料、予約不要)

連続講演会「映像の可能性 文化を記録するとは何か」のお知らせ



本連続講演会(全3回)は、既にその第1回目「女と男が守る島 沖縄・久高島の映像記録44年」が、6月19日(土)の午後3時から、ヴィジュアルフォークロア代表・北村皆雄氏を講師にお招きして行われました。この秋以降はさらに2回ほど、この文化を記録する

媒体としての映像について考える講演会を、催してまいります。その日程などについては右側の囲み記事をご覧ください。

第2回講演会
日 程：2010年10月23日(土) 16:00～
場 所：成蹊大学 9号館301教室
講 演 者：分藤 大翼・信州大学准教授
上映作品：『Wo a bele もりのなか』
(2005年、30分)
『Jengi』(2008年、20分)

第3回講演会
日 程：2010年12月4日(土) 15:00～
場 所：成蹊大学 3号館101教室
講 演 者：弘 理子・映像ディレクター
上映作品：『築地市場大百科』(2008年、60分)

(いずれの講演会も入場無料、予約不要。講演会後は懇親会も行います(参加費無料)。こちらもふるってご参加ください。)

連続映画鑑賞会「映画を通じて知るアジア太平洋の世界」のお知らせ

(協力・成蹊学園国際教育センター)

アジア太平洋研究センター(CAPS)では成蹊学園国際教育センターの協力のもと、学園構成員を対象にした第1回目の本連続映画鑑賞会を、7月16日(金)の昼に行いました(上映した映画はアカデミー賞を受賞した『スラムドッグ\$ミリオネア』〔2008年、イギリス〕)。この秋以降もさらに2回ほど、アジア太平洋世界を舞台にした最近話題の作品を上映

して参ります(講師による20分程度の解説講義を含む)。次回の日程などについては、左下の囲み記事をご覧ください。なお第3回目の上映会は12月頃、中国映画を取り扱う予定です。こちらについても、どうかご期待ください。(上映権の関係上、本連続映画鑑賞会は学園構成員以外の方にはご参加いただけません。ご了承ください。)



第2回映画上映会
日 程：2010年10月25日(月) 14:50～
場 所：成蹊大学4号館ホール
上映作品：『トンマッコルへようこそ』
(2005年 韓国、132分)
講 師：高一(コ・イル)氏
(CAPS特任研究員)
参加費は無料です(本学園構成員のみ)

センター叢書発刊のお知らせ

アジア太平洋研究センター(CAPS)では共同研究プロジェクト(3年間)の研究成果を、センター叢書として刊行しております。この7月には2004年度から行われた共同研究プロジェクト「ジャズと文学 日米の戦後比較研究を中心に」(代表・宮脇俊文経済学部教授)の研究成果、宮脇俊文+細川周平+マイク・モラスキー編著『ニュー・ジャズ・スタディー

ズ ジャズ研究の新たな領域へ』が、アルテスパブリッシング社より発行されました。センター併設の図書館でも同書の貸し出しを行っておりますので、ご興味のある方はどうぞご利用ください。(なお同書の紹介を編著者のひとりである宮脇教授ご自身行っていました。右頁に掲載してありますので是非お読みください。)

センター叢書 紹介 ジャズ研究の新たな領域のために

『ニュー・ジャズ・スタディーズ』
経済学部教授 宮脇 俊文

音楽は聴くものだと思っていた。しかし、ジャズという音楽を聴けば聴くほど、また知れば知るほど、それは聴くだけのものではないことがわかってきた。どんな音楽ジャンルにも、その背景にはそれぞれの歴史があり物語がある。しかしジャズには何か特別なものが存在する。単にメロディーラインを追うだけでは満足しきれない、何か叫びのようなものを感じるのだ。その正体をつかみたいというのが、ジャズ・プロジェクトの成果物である『ニュー・ジャズ・スタディーズ』のスタートラインだった。

あとがきにも書いたことだが、正直に告白をしておく、僕自身それほどジャズに詳しいわけではない。単なる偏ったファンにすぎない。いつもジャズばかり聴いているわけではなく、時には津軽三味線に涙したり、松田聖子の「赤いスイートピー」を口ずさんだりしている。ただ、ジャズが他の音楽と違うのは、そこから伝わってくる「魂の叫び」のようなものを感じる点があるという点だ。すべてがそうではない。BGM的にさりりと流れていくものもある。しかし、中には優れた小説が読者に与える感動のような何かを感じさせる演奏に出会うことがある。それは明らかに魂に訴えてくる何かだ。そこには紛れもなく歴史があり、物語が存在する。その正体はいったいどのようなものなのか。何が聴くものの魂を揺さぶるのか。そんなことを解明してみたかった。

まず、改めて演奏を聴き、できる限りライブに出かけて行って、直接音に触れることにより、全身でメロディーを受け止めることに集中してみた。それから、ジャズの歴史を辿り、特定のジャズマンの生き方にも触れてみた。そうした作業の中から、一本の線が少しずつ形を成しはじめた。それは、「個の確立」であり「自由への渴望」だった。それに気づいたとき、文学と同じ目線でこの音楽ジャンルを見ることができるようになった。

奴隷として強制的にアメリカに連れてこられたアフリカの人々にできることはただひとつ。それは、過酷な労働の中、いかに希望を捨てずに生き続けるかだった。彼らは口ずさんだ。自分を鼓舞することばを。そしてそれはいつしか歌となっていった。ブルースの誕生だ。それが今度は楽器で演奏されるよ

うになり、ジャズという形へと発展していった。実際はこれほど単純明快に説明のつくものではないにしろ、根底にはそうした流れがあったことは確かだ。生きること、個を確立すること、そして自由になること。それがその根底に流れるスピリットだ。ジャズには、そんなスピリットが込められている。

こうしたことを理屈ではなく、肌で感じるができるようになるにはかなりの時間がかかった。そして、それを今度はいかにして書物に反映していくかはさらに難題であった。プロジェクトのメンバーであれこれ話し合った結果、次のような分類はどうかということになった。「聴く」「見る」「読む」「書く」「演る」の五つだ。ジャズは聴くだけのものではなく、それを基本として、そこを超えたところにさらなる広がりが見いだせるというわけだ。これらを総合的に見ることで、この音楽ジャンルの持つ特性がより鮮明に浮かび上がらせることを目指した。

この種のジャズ研究が、我が国においてはまだまだそれほど本格的には行われていないという現実を踏まえ、アメリカにおける優れた先行研究の中からも、いくつか大切なものを翻訳掲載する方法を選んだ。その他はもちろん書き下ろしである。こうして、本書は誕生したわけだが、まだまだ完全とは言えない。しかし、本書のサブタイトルに掲げたように、「ジャズ研究の新たな領域」に一步踏み出すことはできたと考えている。これを土台に我が国において、ジャズ研究の新境地がさらに拓かれていくことを願っている。

最後になったが、このプロジェクトとほぼ並行して、経済学部と文学部において、「文化表象としてのジャズ」に関する講座を開講してきたが、多くの学生がこれに参加し、ジャズ研究に興味を示すようになってくれたことは、本書の上梓と同様に何よりもうれしいことである。この場を借りて学生諸君に感謝したい。



国際シンポジウム報告
 「モダンガールと植民地的近代 東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー」
 文学部 特別任用教授 佐藤 バーバラ

7月17日に一橋大学国立キャンパスにおいて、「モダンガールと植民地的近代 東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー」というタイトルのシンポジウムが開催されました。開催場所は一橋大学でしたが、一橋大学ジェンダー社会科学センターにくわえ、ライス大学チャオ・アジア研究センター、そして成蹊大学アジア太平洋研究センターの協賛をいただくことで、はじめて実現できたもので、ここに厚くお礼を申し上げます。このシンポジウムは、2月の終わりに岩波書店よりシンポジウムと同じ題名で出版した論文集を記念して行われたものです。論文集に寄稿した韓国、台湾、中国、日本の研究者が、それぞれの論文内容を報告し、午後からは武蔵大学の千田有紀氏、青山学院大学の宋連玉氏、東京大学の吉見俊哉氏がコメンテーターとして参加して、合評セッションを開きました。

今回の一連の研究は、もともと7年前にお茶の水女子大学ジェンダー研究センターが中心となって獲得した科学研究費補助金「東アジアにおける植民地的近代とモダンガール」(2003-2006年度)から始まったものですが、そのプロジェクトの立ち上げのきっかけとなったのは、論文集の編者の一人であるタニ・バーロウが、前任校の州立ワシントン大学で2000年につくった「世界のモダンガール研究会」でした。この研究会での研究成果は、私も寄稿した *The Modern Girl Around The World: Consumption, Modernity, Globalization* (Duke University Press, 2008) にまとめられていますが、近現代の



〔シンポジウム会場の様子〕

女性史研究に二つの新たな視点をもたらしたと思います。私のはじめて1920-30年代の日本のモダンガールについて論文を書いたのは、1987年のことでしたが、それから20年たって、モダンガールの出現が、西欧、非西欧を含めた全世界的、かつ同時代的な社会現象で



〔本国際シンポジウムの宣伝に使われたチラシ〕

あることを立証したことがその一つです。そしてさらに、非西欧世界のモダンガール現象の分析については、植民地的近代 (Colonial Modernity) という概念が非常に有効であることを明らかにしたのが二つ目の新しい点でした。非西欧世界では、資本と帝国主義が領土、資源、市場を求めて激しく争っていましたが、1920年代の後半になると、そのような状況の近代は、女性をめぐるさまざまな願望、欲望、ファンタジーにとりわけ明確に反映されてくることが明らかとなったのです。日本での研究会はそうしたワシントン大学の成果を受け継ぎ、韓国、台湾、中国、日本という東アジア地域でのモダンガール現象を、歴史学、社会学、人類学、経済学等の分野を異にする研究者が、さまざまな立場で分析してきました。

私は自分の論文の概要発表だけでなく、当日、最初に「モダンガール問題とは何か?」という基調講演を行い、たくさんの写真を提示して聴衆がモダンガール現象について基本的理解を得るよう努めました。出版記念会を開くよりも、もっと有意義な集まりを持とうと言うことで開催したシンポジウムでしたが、200名を超える研究者、学生に集まっていた、まずは成功を収めたと思っております。

国際会議出張報告・「P2Pオーバレイ・ネットワーク研究」共同研究プロジェクト Network-Based Information Systems 2010 (NBIS2010)

理工学部情報科学科教授 滝沢 誠、CAPS 特別研究員 池田 誠

2010年9月14日から16日の期間、飛騨高山にて開催されたThe 13th International Conference on Network-Based Information Systems 2010 (NBIS2010)に参加したのでその報告をする。

NBIS2010は、13回目の国際会議であり、今年度初めて日本で開催された。NBISは、ネットワークを中心としてその応用まで含めた幅広い分野での最先端の研究発表を行い、研究者相互の意見交換、議論、交流を図る場を提供することが目的である。

NBISはもともとプロジェクト代表者である滝沢誠教授が国際会議DEXAのワークショップとして創設し1998年にオーストリアのViennaで第1回が開催された。以降Florence(イタリア、1999)、Greenwich(イギリス、2000)、Munich(ドイツ、2001)、Aix en Provence(フランス、2002)、Prague(チェコ、2003)、Zaragoza(スペイン、2004)、Copenhagen(デンマーク、2005)、Krakow(ポーランド、2006)、Regensburg(ドイツ、2007)、Turin(イタリア、2008)と、欧州で開催してきた。2009年9月には、米国のIndianapolisで開催され、国際的な会議となった。今回のNBISでは、アジア太平洋地区及び欧米などから約150件の論文投稿があり、3人以上の査読が行われ、新規性、有用性等の観点から優れた論文がプログラム委員会により選ばれ、55件が採録された。また、本会議と併設して、専門分野により特化した5つのワークショップが開催され、合計で35件の論文が発表された。本会議とワークショップの合計で90件の論文発表が行われ、熱心に議論が行われた。また、初日14日には、高山出身の大阪大学の西尾章治次郎教授から、最新のデータベースに関する研究についての招待講演が



(発表中の池田誠特別研究員(右))



〔表彰式での記念撮影。左から2番目が賞を受賞した池田誠特別研究員、左端が滝沢誠教授〕

行われ好評であった。

14日の夕方には、飛騨・世界生活文化センターのレストラン「コリーヌ」でレセプションが開催され、参加者の懇親がはかられた。また、15日の夕方には、「まつりの森」でバンケットが開催され、国島芳明高山市長からの挨拶をいただき、アルバニア大使にも参加いただき、屋台等のデモ、高山の文化・伝統の紹介や会議の表彰式が行われ盛況に開催された。来年度のNBISはアルバニアのTiranaで開催される。表彰式では投稿した論文

Makoto Ikeda, Elis Kulla, Masahiro Hiyama, Leonard Barolli, Makoto Takizawa, and Rozeta Miho, "A Comparison Study Between Simulation and Experiment Results for MANETs", *The 13th International Conference on NBIS2010*, Takayama, pp. 371 - 378, September 2010.

がDistinguished Research Awardに選ばれた。本論文では、研究プロジェクトのテーマでもあるP2Pネットワークの中核をなすモバイルアドホックネットワーク(以下MANETs)に関する研究成果をまとめたものである。本成果として、MANETsの経路制御プロトコルをテストベッドとシミュレーションシステムに実装し、アジア太平洋地区によく見かける障害物の多くある屋内環境における移動ノードからのネットワーク性能への影響を分析しその特性を明らかにした。屋内環境において見通し外通信つまり送信元と宛先ノード又は中継ノードが目視できない環境においてAd hoc On-Demand Distance Vector (AODV) プロトコルがOptimized

Link State Routing (OLSR) と比較して中継端末を効率的に利用し柔軟に移動するネットワークにおいても適応することを明らかにしている。この賞はコンピュータ・ネットワーク関連の研究の中で、特に先端的かつ優れた研究に対して与えられるもので91件の論文の中で1件が選ばれ、今後の研究に對

するモチベーションが上がった。

今回のNBiSでは、準備から会議運営に関する仕事に携わることができ貴重な経験となった。この場を借りて高山市、飛騨センターをはじめ、会議開催までお世話とご支援をいただいた飛騨・高山コンベンション・ビューローには、心から感謝している。

CAPS 主催 拡大研究会 報告

2010年9月1日から30日までの1ヶ月間、アジア太平洋研究センター(CAPS)が外国人研究者に対して研究助成を行う「招聘外国人研究員制度」を利用して、フランス国立東洋言語文化大学のMichel Vieillard-Baron教授が成蹊大学に研究のため滞在されました(本学受入研究者は文学部の浅見和彦教授)。国際的な学術交流の一環として当センターが行っている同制度では、それを利用された招聘外国人研究者の方に、滞在期間中センター主催の拡大研究会にて講演(一般公開・参加費無料)を行っていただいております。Vieillard-Baron教授にも9月27日(月)の16時半から成蹊大学10号館大会議室において、「旅としての『最勝四天王院障子和歌』」と題された講演を行っていただきました。以下はその講演内容について、教授ご自身にしたためていただいたその要約です。

講演：旅としての『最勝四天王院障子和歌』

フランス国立東洋言語文化大学 教授 Michel Vieillard-Baron

『最勝四天王院障子和歌』は中世和歌の独特な作で、その名が示す通り、これは最勝四天王院の障子に書きいられることを目的に詠まれた和歌作品である。最勝四天王院とは、後鳥羽院の勅願により、京都三条白川の地に造営された御堂のことであるが、実際には、御堂一棟だけではなく、御所一棟をも含んだ建築群だった。題名とはうらはらに、これらの障子和歌は、御堂ではなく、御所内を飾っていたものであったといわれる。さて、『最勝四天王院障子和歌』の特徴は、それが名所を題としていることである。選ばれた各名所の景色が障子の上に描かれ、その絵に添えられたのが、これらの和歌である。後鳥羽院の宣に従い、まず四十六の名所が藤原定家・藤原有家・藤原家隆・源通具の協議によって

選定された。これら撰者が御堂そのものの図面である御堂指図を参照しながら名所を選ぶ一方で、定家らは、「景氣(すなわち、和歌そして絵の中で各名所に組み合わせられる景物)そして「時節」(同じく各名所に組み合わせられる季節)を定めると共に、御所内における各名所の配置をも決めた。定家が名所の選定だけでなく、この大事業そのものの遂行にあたって中心的な役割を担っていたことはよく知られている。続いて、九人の歌人が四十六名所のそれぞれに一つずつ和歌を詠進し、そこに後鳥羽院も競作された。したがって、全部で四百六十首が集まった計算となる。最終的には、後鳥羽院みずからが、これら四百六十首より、障子に押される四十六首を選び取られた。『最勝四天王院障子和歌』の成立事情は藤原定家の日記である『明月記』に詳しく記されている。準備は承元元年1207年四月に始められた。六月には後鳥羽院・慈円・藤原通光・俊成卿女・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原(飛鳥井)雅経・源具親・藤原秀能の十人が詠進を終え、九月には和歌所で選定作業が行われた。参加を許された歌人の大部分は、『新古今和歌集』の時代にきらめく大歌人たちである。最勝四天王院の建築群とその障子は完全に失われてしまったが、その造営の際に詠まれた四百六十首の和歌は今日に伝わる。「歌書として



〔写真は講演中の Michel Vieillard-Baron 教授〕

の『最勝四天王院障子和歌』配列・呼応の意味するもの⁽¹⁾と題された論文において、寺島恒世氏は、障子和歌は名所を単純に並べたのではなく、ある一つの旅程を形作るように意図的に配列されたものである、ということ非常に説得力のある論考で示された。地図を片手に眺めながら、我々は、『最勝四天王院障子和歌』に歌われた名所が、寺島氏の言われるとおり、一つの旅を形作るべき順に配置されていることを確認することができた。勿論この順には例外もあり、距離的にやや離れた場所が選ばれ



〔講演会の様子。講演は写真のようにパワーポイントが用いられ、和歌を1つ1つ鑑賞しながら行われた。〕

たり、道のりを逆戻りしたりすることもあれば、また一点から別の点に移動するのに、常に最短距離が選ばれているわけでもない。しかし、これは単なる遠足ではなく、詩的な一大事業であったということ念頭に置く必要がある。従って、名所の選定ならびに配置には、詩的な考慮が優先されたことがしばしばであったといえる。また、象徴的かつ個人的な理由が名所の選定と配置とに影響したことも確認できた。後鳥羽院の特に好まれた名所が、御寝の間というもっとも私的な空間におかれたのはその顕著な例といえよう。渡邊裕美子氏は、『最勝四天王院障子和歌全釈』⁽²⁾という著書において、この事業の斬

新さを明確に証明した。すなわち、本障子歌以前に歌われたことのなかった名所が選ばれており、この機に詠まれた歌がこれらの場所の名所としての地位を確立させ、歌人たちが用いることのできる歌枕の一覧をさらに豊かにした。久保田淳氏は、これらの名所は「そのまま治天の主後鳥羽院が統治する日本国全体の縮図」であると述べており⁽³⁾、吉野朋美氏は、この考えを発展させて、この事業が政治的な性格を持っていたと指摘されている。同氏の述べるところでは、「つまり院は、名所障子絵によって御堂に現出させた仮構の日本と、国土の支配を図っているのである。さらに御堂における障子絵の配置と季節の流れの対応を思いおこせば、院はその障子絵によって季節をも支配しようとしたとも考えられよう。」⁽⁴⁾これらの指摘はまったく適切で、この事業の裏にある政治的性格は疑いないものと思われる。しかし、そこだけに目をとめて、この『最勝四天王院障子和歌』の詩的価値の重要性を忘れてしまうことはできない。当時の歌壇の最も優れた歌人達を選び抜き、古い規則を改めるだけでなく更に豊かにするべく和歌を詠ませた後鳥羽院の真意は、権力のひけらかしということだけではなかったように思われる。そこには驚きと感動をもたらしたいという欲求があり、院は、その意図を読み解くことができた人々の目の前に、美しくとまり、新たなる輝きにあふれた、理想的な日本の展望を見せてくれたのではないだろうか。

(1)『日本古典文学の諸相』勉誠社、1997年。

(2)風間書房、2007年。

(3)『藤原定家』、王朝の歌人9、集英社、昭和59年。

(4)『最勝四天王院障子和歌』について、『国語と国文学』73-4、1996/04。

アジア太平洋研究センター（CAPS）招聘外国人研究員 募集！

2010年12月7日（火）締め切り

CAPSでは、来年度の招聘外国人研究員を募集いたします。詳細は内線3549まで。

便宜供与

滞在期間：Aコースは1～2ヶ月程度、Bコースは1～3ヶ月程度
 宿 舎：国際交流開館を無料提供（A、Bコース共通）
 交 通 費：Aコースのみエコノミー割引航空運賃支給
 謝 礼：右（「責務」）の ～ に対し謝礼支払い

責務

研究会発表（A、Bコース共通）
 ニュースレター原稿執筆
 （A、Bコース共通）
 センター紀要に寄稿（Aコース）

シリーズ 若者たちのアジア太平洋世界（第6回）

『CAPS Newsletter』では昨年度から、成蹊大学所属の若手研究者が行っているアジア太平洋世界の研究や諸活動について、紹介を行っています。今回ご紹介するのは、今年度より文学部助教に就任された岡田泰平先生が行っている研究内容です。

植民地教育の痕跡を追いつづけて

文学部 助教 岡田 泰平

アメリカ植民地期フィリピンについて、植民地教育を中心に研究しています。この教育は基本的には公立学校教育で、アメリカ人がカリキュラム等を設計し、英語が用いられました。独立後のフィリピンでは、この植民地教育を通して、アメリカ人が進んだ価値観や近代知識をフィリピン人に与えたとし、おおむねアメリカ植民地主義の「恩恵」を示す主要な政策と理解されてきました。私の関心は、この教育が「恩恵」であったのか、それともフィリピンのナショナリストが批判するように「植民地精神」を植えつけた装置であったのかという視点とは別のところにあります。むしろ、植民地という歴史的に存在した政治社会体制の中で、この教育が現在のフィリピン人という国民を構築するのにどのような役割を果たしてきたかを解明することにあります。

今までの刊行論文では、次のようなテーマを論じてきました。植民地期の主要な教育政策が同時代アメリカの重要な思潮である革新主義から派生してきたこと。教員雇用の制度の中にフィリピン人とアメリカ人の間に明らかな差別構造があったこと。植民地下の英語教育がどのように展開してきたか。植民地教育はフィリピン人をアメリカ国民として鑄造するためでもなく、フィリピン人としてのナショナル・アイデンティティを確立するためでもなく、アメリカに来る移民に対する教育のように、アメリカ白人をモデルとした抽象的な市民像を教育の根幹に置いていたこと。その結果、植民地教育はフィリピン人がアメリカ本土に行くことを促し、市民権を持たない在米フィリピン人というマイノリティ集団の形成の大きな要因となったことなどです。

現在、取り組んでいるテーマは大きく分けると三つあります。第一にはフィリピン人教員の教室における実践と職業意識についてです。1920年代になると、アメリカ人の数が減り、高校教員と行政職に集中します。小学校で教える教員の大部分はフィリピン人になります。しかし、カリキュラムや教育方法には植民地初期と大きな隔たりはありません。アメリカ人教員とフィリピン人教員の教育実践も非常に似通ったものです。それでは、植民地主義の尖兵であったアメリカ人教員とその跡を継いだフィリピン人教員の相違はどこにあるのか、はっきりした相違がないのであれば植民地教育の植民地的な特性はいかなるものなのかを明確にしたいと思っています。

第二には、植民地教育を「恩恵」と理解する視点では、フィリピン人生徒は自発的に植民地教育を受けたことが含意されています。ところが、植民地教育のもう一つの側面として、アメリカ人の差別発言や差別行為を前にし、生徒が退去して学校を出て行く闘争の形態「学校ストライキ」がありまし

た。この闘争はなかなか十分な資料的裏づけが取れないことが多いのですが、1930年に生じた大きな学校ストライキについては様々な資料を収集できました。マニラの高校のアメリカ人教師の差別発言に端を発しますが、結局、教育局は学校を閉鎖することで、このストを収拾します。収拾する過程で、進級や卒業のために、生徒はストには強制的に参加させられたとする念書を書くことが求められました。この事例は、状況によっては「自発」が取り繕われることにより、植民地秩序が保たれてきたことを示しています。



〔サマル州バラングガにある対米人民蜂起を表した像。現地を歩くことを心がけています。〕

第三には、植民地という制度の根幹に関わる問題です。いわゆる国民国家体制は国民と外国人という区分けを前提としますが、アメリカ植民地期のフィリピン人を含む被植民者はこの二分法から逸脱します。特に、フィリピン人が大量にアメリカ本土に移住する1920年代後半～1930年代前半には、フィリピン人移民はアジア系と位置づけられ、「人種」を根拠としたアメリカ市民権から排除されていました。その反面、植民地において醸成された公定ナショナリズムは、植民地主義こそがフィリピン人の政治的成熟をもたらすという理念の下に出来上がったシビック的な要素の強いものでした。上述の学校ストライキが起きる半月前にはアメリカ・カリフォルニア中部でフィリピン人が白人のモップに殺される事件がおきます。この事件に象徴されるようなアメリカの構造的かつ大衆的な人種差別は政治的成熟とも上述の「恩恵」ともかけ離れたものであり、植民地下の公定ナショナリズムと矛盾していました。今取り組んでいるのは、この事件を通して、フィリピン人政治エリートとアメリカ人行政官がどのようにアメリカ社会の人種差別を理解し、いかにして植民地秩序を保全してきたかを明らかにすることです。

2010年度新規プロジェクトの紹介(第2回)

2010年度共同研究プロジェクト

「環太平洋とポストコロニアリズム 通文化主義の可能性」研究概要

文学部 特別任用教授 大熊 昭信

ポストコロニアリズムとは、第二次世界大戦後に西欧の植民地だった地域が独立を果たした後、植民地主義に対する抵抗や独立の苦闘のさなかで体験された認識や批判を含めた思想的創造的営為の総体のことである。もっと狭義に言えば、70年代に『オリエンタリズム』によって開始され、90年代の『帝国主義と文学』によって完成させられたサイドに代表される文芸批評の流派といってもいい。ところが、93年のソ連崩壊の後、アメリカの世界の一国統治の様相を帯びて世界が一つになったといったグローバリズムの思想が台頭し、もはやポストコロニアリズムは過去のものとなったとする言説も流布するようになってきている。しかし、これにはグローバリズムとは、アメリカによるネオコロニアリズムに他ならないという批判があるし、9・11以後、とりわけサブプライム問題以後の金融崩壊の後には、「帝国」は弱体化し、世界はまたぞろ多極化しようとしているという見解もある。したがって、本プロジェクトには、こうした歴史的事実の認定という判断を見定めるといった仕事があるが、それとともに、すでに積み重ねられたポストコロニアリズムの経験の(今日のわれわれにたいする)普遍的な意味を探求するという重い課題もあるのであると考えられる。そこで、本プロジェクトの意図は、ポストコロニアリズムの理論の総体の今日的有効性を再考しようというところにある。

たとえば現在、英米の文学のなかで盛んに研究されているポストコロニアリズムという批評、研究の主題のひとつに、通文化主義の可能性を探るといったものがある。旧植民地が独立して自民族の伝統的文化に回帰することは単一文化主義である。ところが近代化の名のもとに宗主国西欧の文化を全面的に採用することは、これまた単一文化主義の別名にほかならない。さらに単一文化を尊重しあう多文化主義もまた根底的には単一文化主義である。そこでさまざまな文化の融合を企てるものとしてあらたな雑種文化の形成を目指す立場もある。だが、そうした場合、そこには、たとえば、雑種文化が誕生した場合、旧植民地の自立や民族としてのアイデンティティはどうなるのかといった問題が発生している。そこで英米のポストコロニアリズムの批評・研究では、そうしたさまざまな文化の間に立つ立場とともに、両者の文化を横断するような形でその共通性を探るといった立場が主張されている。それがいわゆる通文

化主義である。これはポストコロニアルの作家の振る舞いに端的に現れている。本プロジェクトでは、そうした作家の振る舞いを跡付けるとともに、それを一般化し、今日の日本と世界の政治的文化的社会的歴史的な諸側面の問題理解と解決に光を差し伸べることを期待している。

そうした展望のもとに、日本を取り巻く世界におけるポストコロニアリズムの過去と現在を具体的に検討することを本プロジェクトは企図している。環太平洋諸国と一口でいってもざっと48カ国余りを数えるわけだが、本プロジェクトでは英語で書かれた作品のある諸国を研究対象としている。総勢11



〔スタンフォード大学のグリーン図書館。イギリスの女性作家Mary Webbの直筆の原稿や手紙の資料公開の展覧会が開催中で、Mary Webb: Neglected Geniusの垂れ幕が掛っている。本プロジェクトで海外出張した庄司宏子文学部教授撮影〕

人の英米の文学研究者が、中国(ティモシー・モー、カズオ・イシグロ、J・G・バラード)、オーストラリア(D・H・ロレンス)、ニュージーランド、太平洋島嶼国(R・L・スティーヴンソン、サマセット・モーム)、アメリカ(アメリカ・インディアン、日系移民)、カナダ(マーガレット・アトウッド)にかかわる作家を取り上げて、その作品や作家の思想や行動を具体的に探求することになる。

初年度は理論的な研究を進め、第2年度は、中国、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋島嶼国、第3年度は、アメリカ先住民、日系移民、カナダの英語文学を扱い、それぞれ年2回の研究会での研究発表や討議によって共通理解と個別研究の深化を図る予定である。

シリーズ 本を読む

大橋 直子・小山 諭『中国で成功するマーケティング』
 (日本経済新聞出版社 2008年4月7日発行)

経済学部 准教授 山本 晶

本書は5年あまりに及ぶ博報堂独自の定量・定性調査の分析結果から、中国の消費者および中国市場を解説した本である。中国は2010年上半期の経済成長率が前年比プラス11.1%、第1四半期のGDP伸び率がプラス11.9%という目覚ましい成長を遂げている。この成長市場は魅力的な市場であるが、変化の速さ、広大な国土ゆえの地域格差、世代間格差の激しさといった中国の固有の事情のために、マーケティング活動の実施は困難を極める。また、中国市場に進出することは、この市場を狙う世界規模の熾烈な競争に直面することを意味している。このように魅力的ではあるが同時に成功が難しい中国市場において、自分の商品やブランドのターゲットを誰にしたらよいのか。また、マーケティング活動を行っていく際に、何に重点を置き、何に留意しなくてはいいか。本書はこうした企業が目の当たりにする問いに多くのヒントを与えてくれる。

第一章では日・中・香港・シンガポールの比較による中国生活者の生活意識の違いと、中国国内における地域差について述べられている。生活意識に関する調査では、日本以外の3都市では現在の生活について「状況がよくなった」との回答が多く、今後の生活について明るい見通しをもっており、消費意欲が旺盛であることが示されている。また、近年製品のデザインが重視される傾向にあり、消費生活が洗練されつつあることが述べられている。

中国固有の価値観としては、「家族意識」が挙げられている。2003年と比較すると「家族重視」志向は低下傾向にあり、「自分中心」志向が上昇傾向にあることが読み取れる。しかし、「子供のために財産を残したい」という考えが今もなお根強く、こうした傾向はGDPが欧米並みの香港・シンガポールにおいてもみられることから、中華圏特有の「家族意識」が変わらずに残っていく可能性があるかと予測される。全体の傾向としてライフスタイルや消費意識において男女差は小さいが、世代間の格差が大きい。また、一口に中国と言っても上海、北京、広州など地域ごとに消費者の価値観が大きく異なることは、この市場の特徴のひとつである。

第二章からは世帯月収6000元(約9万円)以上で、消費・人生全般に積極的な「パワー生活者」と定義された人々に焦点をあて、彼らの意識や行動、取り巻く状況や顧客接点等の分析がなされている。中国のパワー生活者を分析するうえでのキーワードは「住居と自動車」である。中国の主要都市では空

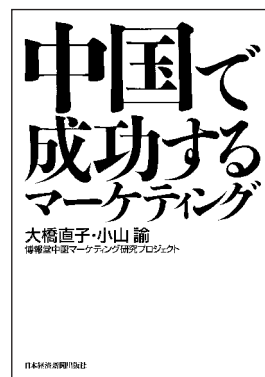
前の住宅開発ラッシュであり、パワー生活者にとって自分で家を買うことは当たり前になりつつある。自分の立場にふさわしく振舞うことを指す「面子」という中国固有の価値観を背景に、住居はパワー生活者にとって最高の自己表現の場となっている。また、自動車は中国富裕層の代名詞でもあ

る。本書の調査によると、自動車保有率は主要36都市においても一割に満たない。自動車保有者はパワー生活者の中でも所得面でトップクラスの消費者が半数を占めている。この一握りの自動車保有者は自動車保有コミュニティの「车友会」、あるいは洗車場といった場で積極的な情報交換を行っている。こうした場は自動車マーケティングの新しい顧客接点としての可能性を秘めている。

第三章では中国ならではの広告媒体として、ケーブルテレビ、大胆でユニークな屋外広告、耐久財と位置づけられる雑誌、インターネット等が挙げられている。そして、第四章では平日は都心、週末は郊外で暮らす「5+2生活方式」や健康・長寿への関心の高まり、シックスパケッツによる教育熱といった「消費のコト化」のトレンドについて触れられている。消費のコト化とはモノの消費からコトの消費へのシフトを指し、日本でもみられる現象であるが、ここでは中国市場固有の体験型消費のトレンドを紹介している。

最終章においては全体のまとめとしてパワー生活者の心をつかむマーケティングのヒントが挙げられている。中国には日本にない中国独特の意識や概念が存在する。中国で成功するには中国市場の特質を知り、観察を続けることが大前提といえそうだ。

本書は2008年に出版されているため、分析されているデータはそれ以前に取得した調査データである。読了後の当然の反応として、2010年現在の中国市場のトレンドはどうなっているのだろうかという疑問を持つ。博報堂のウェブサイトを見ると、直近の中国市場の定点観測の調査結果が掲載されており、同社が現在も独自調査を継続していることが伺える。最新のデータをまとめた続編の出版が待ち遠しい。



白杵 陽『大川周明ーイスラームと天皇のはざままで』(青土社 2010年8月10日発行)

法学部 非常勤講師 田浪 亜央江

日本でイスラームやイスラーム圏について研究している、あるいはそれに持続的関心をもっている人間の多くにとって、本書の刊行は間違いなく「事件」であるに違いない。

本書は「大東亜戦争」のイデオログとして活躍し、東京裁判でただ一民間人のA級戦犯として訴追された(のち精神錯乱により免訴)大川周明について、彼のイスラーム観を鍵として論じたものである。大川がアジア主義者として戦中に『回教概論』を著し、戦後、流麗な文語体を用いたクルアーン(コーラン)の翻訳を完成させたことはよく知られるところだが、大川とイスラームの結びつきについて本格的に論じた研究はこれまで皆無であった。本書は大川が「急進ファシスト」「超国家主義者」であることは前提としつつも、それだけでは収まりきらないイスラーム研究者としての大川に光を当てることで、学者としての大川の卓越性や思想家としての「節操」を再評価し、また他方で彼の変容や矛盾がどのように生じたのかについて、時代状況や彼が依拠した文献に即して見事に説明してみせている(念のために書けば、これは侵略戦争やファシズムのイデオロギーをそのまま擁護しようとする姿勢とはまったく異なる)。中東地域研究者である白杵陽によって日本思想史の大きな欠落がこのようなかたちで埋められることに対し、同じ地域を研究対象として来た人間の端くれとして筆者は大きな興奮を覚えるし、『回教概論』を媒介として大川に関心の糸をつなぎながらもそれを立体的なかたちにしてこなかった者としても、本書を手に出たことは大きな喜びである。

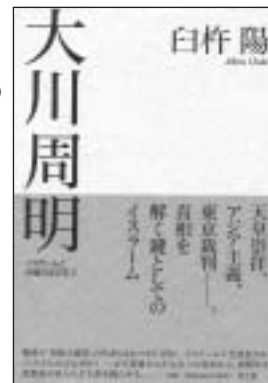
本書はかねてから著者が関心を持ってきた竹内好による大川論をモチーフの一つとしており、1969年の講演で竹内が『回教概論』を「日本のイスラーム研究の最高水準」だと評価し、同書が日本帝国主義のアジア侵略とは「何の関係もない」と述べていることを契機として成立している。竹内によるそうした評価は、『回教概論』の内容が「大東亜戦争のイデオログ」という大川のイメージとかけ離れていたため「意外」だったという著者の印象と重なるものの、他方同じ講演で竹内は、大川には「イスラームによる世界征服というヴィジョン」があるような気がする、とも述べているのだ。つまり大川とイスラームの結びつきには二つの側面があり、そのことをおそらく認識しつつも十分に言語化していない竹内の大川論を詳細に検討した上で、白杵はこの二つの側面がイスラームのもつ「二つの顔」に対応して

いることを指摘する。すなわち内面を重視するスーフイズム(神秘主義)と、政教一致指向的な現世主義としてのイスラームである。若かりし頃に大川が初めて触れたイスラームは前者だったが、ヘンリー・コットンの『新インド』を読み植民地主義に蹂躪されたアジアの悲惨さを知りアジア主義

者として目覚めて以降、彼はイスラームのもう一つの側面である「政治と信仰が一体となった」運動としてのイスラームに惹かれる。しかし『回教概論』を著した当時、すでにそうした理想型としてのイスラームは存在しておらず、大川はイスラーム観の見直しを余儀なくされ、また大東亜共栄圏構想の破綻とともに、大川自身のイデオロギー的立場も崩壊する。さらに東京裁判を契機とした精神錯乱を通じて「理想の人間像」としての預言者ムハンマドに傾倒するようになり、当初のスーフイズム的なイスラーム認識へと回帰したというのである。

紙面の都合で一部にしか言及できないのが残念だが、他にも大川を「日本的オリエンタリスト」として位置づけ、日本におけるオリエンタリズムの再評価を促すなど、刺激的な論点が随所に見い出され、今後日本近現代におけるイスラーム受容を切り口とした思想史研究の発展を促すだろうという期待も感じさせる。

中東地域研究者として白杵はこれまで、パレスチナ民族運動研究、シオニズム研究、現代イスラエル研究など広範な仕事を行ってきたが、ついに戦時期日本のイスラーム研究との「二足のわらじ」を履くことになったわけである。それは北海道における和人の入植過程を研究後にイスラエルに渡り、パレスチナにおけるユダヤ人入植村研究を行なった故大岩川和正や、植民地主義としての日本の近代化プロセスをパレスチナ研究のなかに含み込ませることを提唱して来た板垣雄三といった先達の仕事の幅や問題意識にも重なるものだと言える。イスラームを取り囲む状況が世界大で危機的になり、日本の中東地域研究も岐路に立つなかで、地域研究において自らの足場を問う姿勢が正当な場をもつことの意義は計り知れない。



富永 茂樹『トクヴィル—現代へのまなざし』(岩波書店 2010年9月17日発行)

CAPS主任研究員 愛甲 雄一

ついに出版か、というのが本書を手にした多くの者の、おそらく最初の感慨であろう。アレクシ・ド・トクヴィル(1805-1859)の思想と著作についてはその「人気」ぶりにも関わらず、新書という形で紹介されることは、これまでほとんどなかったからである。革命後のヨーロッパという激動の時代を生き、その変化の意味と行く末を読み取ろうとしたこのフランス知識人の著作は、現代の「大衆社会」理解にも通ずるものとして、今日多くのひとびとが注目するところとなっている。したがってその彼の思索が広範な読者層を持ち得る新書版で論じられることは、言わば時間の問題でもあった。本書の著者がそうした「期待」を背負いつつ、この著作をものした「勇気」に対し、まずは敬意を表しておきたい。

後世においてトクヴィルの名声を不動にしたのは、『アメリカのデモクラシー』(1835・40年)という著作が持つその魅力と啓発力である。題から察するにそれは「アメリカ論」とも受け取れるが、しかし本書執筆に関するトクヴィル自身の動機はと言えば、それは彼が「アメリカの中にアメリカを超えるものを見たこと」にあった。つまりトクヴィルが時代の避け難い流れと見た「デモクラシー」この概念を彼は、「諸条件(境遇)の平等」というエートスが支配する社会、という意味で用いているの浸透ぶりはアメリカでもっとも際立っており、したがってアメリカ人の精神や習俗、社会の状態などを観察・分析することによって、彼は、その進展がもたらす帰結や問題を抉り出そうとしたのである。本書が現代の読者をも依然刺激して止まない古典であり続けるのは、そうしたトクヴィルの関心が持つ射程の長さ抜きには考えられない。それは、19世紀初頭のアメリカという時間的・地理的制約を超えた意味を持ち得る、言わば現代文明論とも呼び得る作品であった。

富永氏の『トクヴィル』はこの名著の議論を軸にしなが、トクヴィルの描き出した「デモクラシー」社会の様子、そこでの人間のあり方などをさまざまな角度から詳らかにしている。キーワードはトクヴィル自身も用いる「憂鬱」「個人主義」「部分」「民主的専制」「群集(群れ)」といった言葉であるが、そのいずれもが実は、経済的な利益追求に明け暮れるものの、その欲望は永遠に満たされない孤立した個人、「平等」という均質性志向のゆえに「多数」に対してはすくなくびくが、しかし実際には「私」にしか関心を抱かない原子化した個人から成る社会を表象している。トクヴィルはこうした社会がアメ

リカで、あるいはフランスその他のヨーロッパで、既に不可逆的な趨勢として出現の途路にあったことを的確に見通していた。ただアメリカ(特にニュー・イングランドのそれ)ではタウンシップに見られる活発な自治の精神、多種多様な自発的結社の存在、そして宗教の影響力の高さなどを通じ、そうした個人の「私化」に対して一定の歯止

めがかけられていた。富永氏はひとびとのデラシネ化を防ぐこうした伝統や思考、制度について、「形式」(これもトクヴィルの用語)という呼び名を与えている。そしてこの形式が持つ可能性に対し、このフランス人が一貫して関心を抱いていたことを、彼の切実な思いとして指摘するのである。

本書でも暗示されているように、昨今のトクヴィル人気の背景には、彼がアメリカ社会の分析として指摘したその種の「形式」について、それらを現代社会の直面する問題への「処方箋」と見る向きが広まったことが、深く関係している。彼の描き出した「デモクラシー」はまさに日本を始めとする現代社会の状態そのものであり、したがって多くの読者にとって自発的結社や自治の伝統の再興こそが、目の前の閉塞した社会を蘇らせる手段と映ったのだった。しかし本書の著者である富永氏は、そうした「処方箋」をトクヴィルに安易に見出そうとする姿勢に対し、トクヴィル自身の意図に即して抵抗を試みている。こうした「処方箋」に関する話は本書の末尾でわずかに触れられるに過ぎないことから、そうした著者の意識がうかがえよう。

トクヴィルの真意は「デモクラシー」がもたらす問題に対し、即席の解決策を見出すことにはあつたのではなく、まずは必ず訪れるだろう社会の状態を徹底して見つめることにはあつた。この社会は理想から程遠い社会であるが、これが現代に生きる我々の条件であり、動かすことのできない出発点である。こうした観点に立った時「われわれ」ははじめて、未来に向けての一步を踏み出せるのではないか。本書は、トクヴィルの思索を通じてこうした言葉を語りかける、現代社会の問題に取り組もうとするすべての者たちへの適切な入門書と言えるだろう。



波戸岡景太『オープンスペース・アメリカー荒野から始まる環境表象文化論』
(左右社 2009年10月20日発行)

CAPS 客員研究員 菅原 大一太

私たちは、アメリカ合衆国の「ネヴァダ州」という言葉を聞いて、どのようなことが頭に思い浮かぶであろうか。たとえば、カジノやきらびやかなネオンサイン、また、有名歌手のコンサートが頻繁に行われることでも知られる都市、ラスヴェガスが容易に挙げられても不思議はない。全米の中でもとりわけこの都市が、人々の持つさまざまな欲望を刺激し、またそのことによって、人を集める強い求心力を持つことを考えれば、この連想はむしろ自然な流れであろう。

確かに、ラスヴェガスに限らず、都市は時として、その属する州のイメージを代表し、さらには、人々の地名への認知の度合いとしては、都市が州を凌駕してしまうこともあるだろう。アメリカにおける都市とは、それぞれの都市が、いわば「アメリカ」という記号の恣意性に依拠している指示対象として機能するものである。17世紀の入植から始まり、「明白なる運命」の名のもとで西へとフロンティアが押し広げられていく19世紀の領土拡張に至るまで、都市の数はそれに応じて順次増えていった。そして、それらが増幅していくその様が、すでに「アメリカ」そのものの表象となっていたのである。

アメリカの領土拡張期という歴史的な文脈から立ち現われてくるのは、文明と荒野の2項対立であるが、西への領土拡張によって都市を打ち立てることは、そもそも領土を広げることが可能にする環境があつてこそ成り立つ営為である。地図の上であれば、多くの「点」として示される都市は、アメリカにおいて、元々何の印もついていない空欄に、一つ一つ書き込まれたものであつた。つまり、誰のものでもないとして了解できる「無」の空間があつてはじめて、フロンティアの拡張は可能となつたのである。

しかしながら、それは本当に「無」と呼び得る空間だったのであろうか。西部の都市の中には、新たに開発されたものがある一方、現在に至るまでの間で、過疎と化したものもある。それらは確かに、発展や進歩といった基準から考えれば、「無」であり、マイナス査定を受ける。だが、だからといって、そこに潜む人間性や歴史性もあわせて消え去ってしまったかといえば、むしろそれは「プラス」の価値を生み出しているのではないか。アメリカの土地として、一旦意味付けされた「無」の土地には、そこ

にアメリカとしての意味付けを新たに用意する必要があるのではないだろうか。

波戸岡景太著、『オープンスペース・アメリカ』は、詳細かつ綿密な論考で、この問題に答えてくれる。表題に含まれる「オープンスペース」とは、著者が廃墟を前にして、「この何も無い町の風景には、確かに何かがある(傍点、原文のまま)」ととらえられる空間である。これはいいかえれば、「無」は無であっても、「無」自体は存在しているという、逆説的な存在として都市を位置付け、まるで罫線入りの紙のごとく、そこへ意味が付与されることを準備しているような空間であることを示しているのだ。そうして、この空間は、『開かれた』というよりもむしろ、『閉じられていない』ことが肝心の、アメリカの空間として位置づけられる。

この語を通底とし、著書自身の体験を皮切りに、ケルアックやピンチオン作品、さらには、映像テキストまでもが論考の対象となり、エコクリティシズムの手法を駆使して、本書でそれらは読み解かれていく。瓦礫と廃墟のゴースト・タウンは、そこで発見された水棲爬虫類の化石と結び付けられる。そして、「アメリカ西部のオープンスペースで・・・来訪の知れぬ生物と人工物が、人知を超えた力によって一か所に集められそのまま置き去りにされる」ことで、ようやくこのゴースト・タウンは、「アメリカ特有の廃墟」としての市民権を得た。また、テキサス州のパリは、地元の人にとっては定住がテキストによって拒まれる、「異郷を内包した故郷」となり、ヴェンダースのロードムービーが「際限のない移動を続けた西部人たちの姿と重なり合」わせられるのだ。

本書によって、いわば点として表される都市空間以外の空白に、新たな意味が付与されることで、アメリカの全体像はさらに肉厚にとらえられていくことであろう。



センター活動報告

(2010.6.15 ~ 9.15)

6月19日(土)センター主催連続講演会「映像の可能性」
第1回講演会開催、15:00-18:00

テーマ:「女が男を守る島 - 沖縄久高島」

講演者: ヴィジュアルフォークロア代表・北村 皆雄

場所: 3号館 101 教室

出席者: 33名

6月19日(土) P2P オーバーレイ・ネットワーク研究プロジェクト海外出張(6月27日帰国)

出張者: 理工学部教授・滝沢 誠

調査地: ティラナ(アルバニア共和国) ジェノア(イタリア)

目的: ティラナ工科大学での共同研究と、国際会議 MNSA2010 での研究発表

6月26日(土) 社会的な不平等プロジェクト研究会開催、13:00-19:50

目的: 昨年度実施した西東京市民調査の分析結果を参加者全員が持ち寄り、書籍出版に向けた分析の方向性を議論

場所: アジア太平洋研究センター会議室

出席者: 7名

7月1日(木) センタープロジェクト海外出張(7月4日帰国)

出張者: センター主任研究員・愛甲 雄一

調査地: ソウル(大韓民国)

目的: 第9回日本・韓国政治思想学会国際学術会議に参加、発表。また来年度同学会がセンターの主催で成蹊大学にて行われるにあたっての、その打ち合わせ。

7月13日(火)「日本」という表象の形成研究プロジェクト海外出張(7月22日帰国)

出張者: 文学部准教授・日比野 啓

調査地: ニューヨーク(アメリカ合衆国)

目的: 資料収集、リンカーンセンター・フェスティバル出席、観劇、及び共同研究者との打ち合わせ

7月16日(金) センター主催(国際教育センター協力)連続映画鑑賞会開催、10:40-13:10

上映映画: 『スラムドッグ\$ミリオネア』(2008年、イギリス)

講演者: 文学部教授・竹内 敬子

場所: 3号館 303 教室

出席者: 150名

7月17日(土)一橋大学ジェンダー社会科学センター主催国際シンポジウム開催(アジア太平洋研究センター他協賛) 11:00-17:00

テーマ: 「モダンガールと植民地的近代 東アジアにおける資本・帝国・ジェンダー」

講演者: 文学部特別任用教授・佐藤 バーバラ 他

場所: 一橋大学東キャンパス 2号館 2階 2201 教室

7月27日(火) P2P オーバーレイ・ネットワーク研究プロジェクト海外出張(7月30日帰国)

出張者: 理工学部教授・滝沢 誠

調査地: ソウル(大韓民国)

目的: 国立ソウル工業大学での共同研究と、国際会議 IEEE AINA2015 の打ち合わせのため。

7月31日(土) アイデンティティの創生プロジェクト研究会開催、15:30-17:45

テーマ1: 中国の北東アジア研究に見られる“北東アジア”- 北東アジアにおける複層的アイデンティティへの一視角

報告者1: 島根県立大学准教授・江口 伸吾

テーマ2: 帝国論とアイデンティティ研究

報告者2: 法学部教授・湯山 トミ子

場所: 10号館第一中会議室

出席者: 5名

8月8日(日) 難民・強制移動民研究プロジェクト海外出張(8月27日帰国)

出張者: 桜美林大 LA 学群法学政治学系・佐藤 以久子

調査地: イギリス、オランダ、スイス

目的: 研究資料収集

8月24日(火) 環太平洋諸国とポストコロナリズム研究プロジェクト海外出張(8月31日帰国)

出張者: 文学部教授・庄司 宏子

調査地: カリフォルニア(アメリカ合衆国)

目的: 文献の閲覧、資料収集

8月29日(日) 日中経済刑法の比較研究プロジェクト海外出張(9月1日帰国)

出張者: 東京大学大学院法学政治学研究科教授・佐伯 仁志

調査地: 中華人民共和国

目的: 実地調査、研究会への参加

8月29日(日) 日中経済刑法の比較研究プロジェクト海外出張(9月3日帰国)

出張者: 法学部教授・金光 旭

調査地: 中華人民共和国

目的: 実地調査、研究会への参加

9月13日(月) P2P オーバーレイ・ネットワーク研究プロジェクト国内出張(9月17日まで)

出張者: センター特別研究員・池田 誠

調査地: 飛騨高山

目的: 国際会議 NBiS2010 への参加

センター招聘外国人研究員

9月1日(水) フランス国立東洋言語文化大学教授、ミシェル・ヴィエイヤール・バロン氏が「建礼門院右京大夫集」に関する研究のため来日(9月30日まで滞在)

9月9日(木) ティラナ工科大学(アルバニア共和国)助教、スパホ・エプヨラ氏が「Secure JXTA-Overlay P2P Systems」に関する研究のため来日(9月13日まで滞在)

9月10日(金) ティラナ工科大学(アルバニア共和国)教授兼情報工學部長、ロゼッタ・ミホ氏が「Autonomic Cooperation of Multiple Peers in P2P Overlay Networks」に関する研究のため来日(9月30日まで滞在)

9月17日(金) Curtin 大学(オーストラリア) DEBI 研究員、フセイン・カディール・ファルーク氏が「Semantic Navigations of Scalable Databases in Digital Eco Systems」に関する研究のため来日(9月21日まで滞在)

CAPS Newsletter No.108

2010年10月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: http://www.seikei.ac.jp/university/caps/